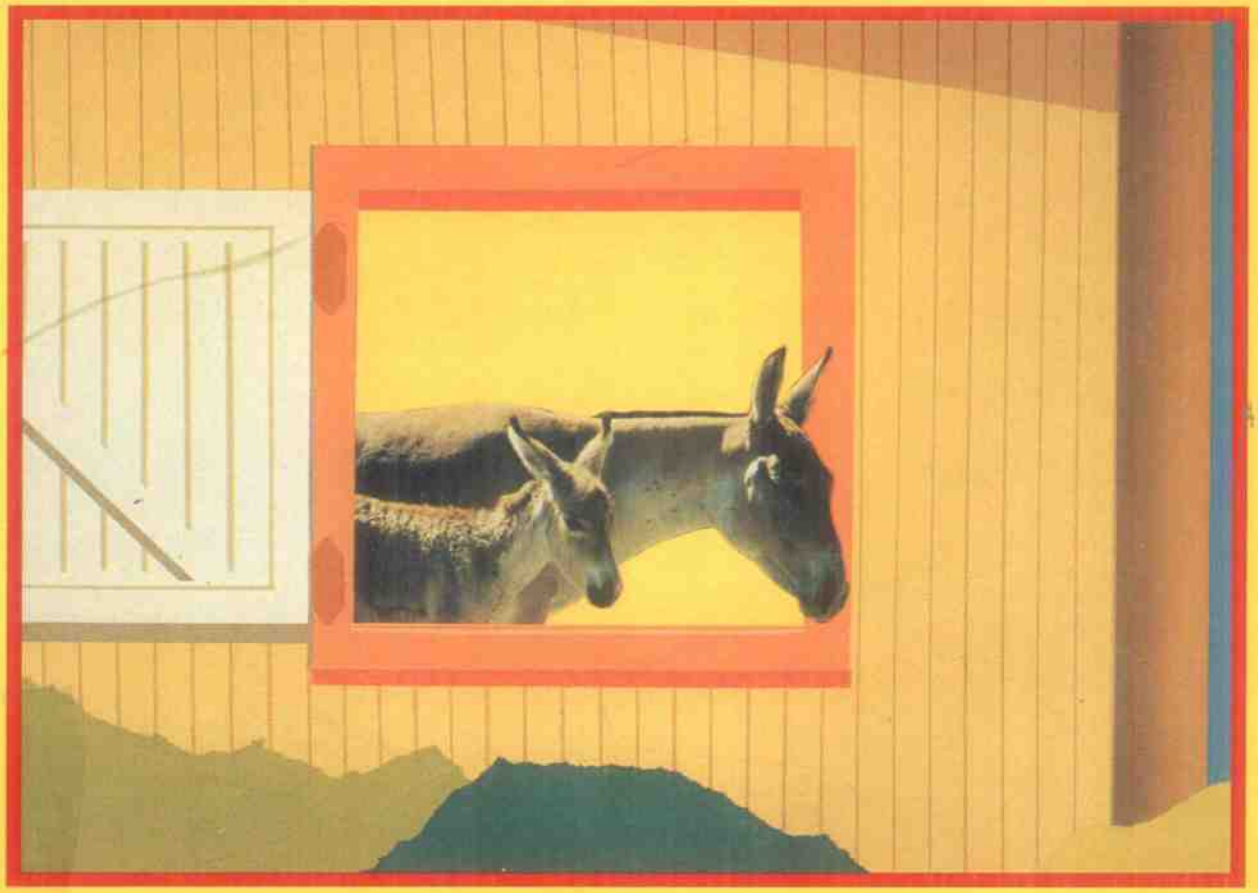
日语能力考试教材系列

王银芳　聂中华编著

现代日语读解



四川大学出版社

日语能力考试教材系列

现代日语读解

王银芳 聂中华 编著

四川大学出版社

前 言

“读解”是提高日语综合能力的重要环节。要读懂、正确理解日语文章，不仅仅是一个词汇问题，对作为语言环境的日本社会、文化、风习等的理解至关重要。从理论上讲，语言是客观的“物质的存在”，或具体，或抽象，但它所涵盖的即是世间一切事物。其不同的形式、排列乃至运用方式，代表着表述主体对世界的认识。一切语言如此，日语作为一种语言，有其区别于其他语言的特点。这一特点即反映了日本民族独特的思维与表达方式。而通过文章阅读来理解和把握日本民族独特的思维和表达方式，恰恰是我们学习日语的主要目的之所在。

目前，日语学习者往往找不到难易适中、内容丰富、体裁多样的文章，难以实现通过阅读来达到补充知识、提高日语能力的目的；一些学生为准备日语水平考试盲目击地做简单化的习题，从而难以实际提高自己的日语水平，收不到良好的效果。

编者在从事日语专业教学过程中，切身感受到上述问题带来的负面影响。因此从搜集的大量文章中精选出各种题材的现代日语文章，通过编辑，整理，提供给广大日语学习者。

本书作为日语教学与学习不可缺少的教材，主旨在于通过大量阅读，加强对词语基础知识的掌握，提高语言的实际运用能力，培养对日语的整体感性认识，加深对日本各方面状况及日本人思维方式的理解，以达到真正掌握日语，并以其进行交流的目的。

本书题材广泛，内容丰富，涉及日本的历史、社会、政治、文化、习俗、现代生活等诸多方面，通过该书的学习，可以了解日本社会及民族的各个层面；编写系统，由易到难，循序渐进，充分考虑到了学习者接受知识的渐进性；适用面广，不仅适用于专业教材，还适用于非专业或业余学习者；科学性强，体例严谨，每个问题的设定都充分考虑问题的解答和文章理解之间的关系，并融学术性于其中。

作为能力检测，文章后面设有相应的测试题。并编写了大量的模拟题。所有题目按近10年来的日本国际交流基金主办的日本语水平测试（JPT）的标准设置。在强调文章读解能力提高的同时，充分考虑到了国际考试的规范性要求。

本书可供大学日语专业泛读课、大学日语阅读课及各类日语教学选用；适用于大学日语专业学生、非专业学生及各类日语学习者为提高自我日语能力的阅读；同时，文章及问题的难易程度按日本语水平测试（JPT）标准的2级至1级排列，是日语水平测试及大学日语四级测试、研究生日语考试等的参试者不可多得的辅助教材。

在本书即将付梓之际，谨对曾给予鼎力协助的杭州师范院校日本专家八田由子女士，以及从前期准备阶段一直给予热情帮助和大力支持的四川大学出版社黄新路先生一并表示由衷的谢意。

由于时间仓促，水平有限，书中的疏漏及不足之处在所难免，诚请日语前辈及广大读者批评指正。

编著者

2006年9月于浙江工商大学

目 次

第 一 課　夕顔　/1
第 二 課　感受性の領分　/3
第 三 課　あこがれ　/5
第 四 課　そのままの自分を活かす心理学　/7
第 五 課　二十一世紀に生きる君たちへ　/9
第 六 課　甘さと辛さ　/11
第 七 課　蘭　/13
第 八 課　自己表現　/15
第 九 課　京ことば　/17
第 十 課　「私」のいる文章　/19
第十一課　母の死と新しい母　/21
第十二課　回帰現象　/23
第十三課　歩きながら考える　/25
第十四課　古典をどう読むか　/27
第十五課　Sweet Basil　/29
第十六課　日本語の個性　/31
第十七課　地下鉄はデジタル感覚　/33
第十八課　ちぐはぐな身体　/35
第十九課　生まれ出づる悩み　/37
第二十課　無常のリズム　/39
第二十一課　新しい刃　/41
第二十二課　ゆく秋の　/43
第二十三課　公衆電話のボックス　/45
第二十四課　人間の夜行性　/47
第二十五課　時間的な水と、空間的な水　/49
第二十六課　頭がいい人　/51
第二十七課　人生は旅　/53

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第二十八課　文学を味わう　/55
第二十九課　反発の魅力　/57
第三十課　色紙　/59
第三十一課　掃除　/61
第三十二課　日本の異文明　/63
第三十三課　季節の移ろい　/65
第三十四課　俳句を読む　/67
第三十五課　故郷　/69
第三十六課　猫　/71
第三十七課　寒村に行く　/73
第三十八課　馬琴　/75
第三十九課　夕景色　/77
第四十課　踏絵　/79
第四十一課　自由画　/81
第四十二課　岬の光り　/83
第四十三課　短歌　/85
第四十四課　水すまし流るる柘植の花を追ふ　/87
第四十五課　探しゲーム　/89
第四十六課　ことばと法律　/91
第四十七課　都市の思想　/93
第四十八課　「名づけ」の精神史　/95
第四十九課　生きられた家　/97
第五十課　日本の自我　/99
第五十一課　音楽を呼びさますもの　/101
第五十二課　日本語の表と裏　/103
第五十三課　ことばの社会学　/105
第五十四課　女性の論理　/107
第五十五課　「文は人なり」から「文は物なり」へ　/109
第五十六課　声　/111
第五十七課　国家語をこえて　/113

第五十八課　大衆小説の世界と反世界　/115
第五十九課　文学の擁護　/117
第六十課　批評の精神　/119
第六十一課　言葉と身体　/121
第六十二課　批評へ　/123
第六十三課　読書と社会科学　/125
第六十四課　哲学の現在　/127
第六十五課　庄　子　/129
第六十六課　反科学論　/131
第六十七課　梅花の気品　/133
第六十八課　俳諧の本質的概論　/135
第六十九課　俳句の型式とその進化　/147
第七十課　博士問題とマードック先生と余　/150
第七十一課　函館の大火について　/155
第七十二課　八十八夜　/163
第七十三課　初蛙　/174
第七十四課　初恋　/177
第七十五課　花吹雪　/194
第七十六課　母を尋ねて三千里　/207
第七十七課　バラック居住者への言葉　/220
第七十八課　大導寺信輔の半　/223
第七十九課　千生と島原の巻　/233
モギテスト（一）　/291
モギテスト（二）　/297
モギテスト（三）　/303
モギテスト（四）　/309
モギテスト（五）　/316
モギテスト（六）　/321
モギテスト（七）　/326

モギテスト（八）　/333
モギテスト（九）　/336
モギテスト（十）　/342
モギテスト（十一）　/348
モギテスト（十二）　/354
モギテスト（十三）　/360
モギテスト（十四）　/365
モギテスト（十五）　/368
モギテスト（十六）　/370
モギテスト（十七）　/378
モギテスト（十八）　/382
モギテスト（十九）　/388
モギテスト（二十）　/394
モギテスト（二十一）　/400
モギテスト（二十二）　/406
モギテスト（二十三）　/411
モギテスト（二十四）　/414

第一課　　夕顔

白洲正子

私は夕顔の花が好きなので、毎年育てている。夕方の四時になるといっせいに開き、明け方にはしぼんでしまうが、次から次へ蕾をもっているので、八月の半ばごろから霜が降るまで咲き続ける。名月の晩などは、そこはかとない花が闇の中に浮き出て、①えもいわれぬ風情である。

蕾は白いハンケチをしぼったような形をしており、いつも知らないうちにほころびているので、夕顔が笑みのまゆを開く瞬間を私はまだ見たことがない。それは白い絹がはらはらとほどけるように咲くのか、それとも蓮の花のようにいっきに開くのか、たぶん、前者の方であろうと想像していたが、ある日、その②決定的瞬間に立ち会うことにした。何もそんなに大げさに考える必要はないのだが、人知れず咲くことを思うと、見るのがはばかられるような気がしないでもなかった。

夕顔は私の居間の前の垣根から、屋根の上まで蔓をのばしているが、今日咲く蕾に集中して目を離さぬように努めた。やがて、四時になった。そら、咲くぞ、咲くぞと、息をひそめて待ったが、蕾はピクリともしない。五時、六時、七時、私は御飯も食べず見つめていた。すると不思議なことに、その蕾は、かすかにふるえるような動きを見せたかと思うと、しまいには生きる力を失って首を垂れてしまった。ほかの花はみな元気に咲ききっているのに、これはどうしたことか。③もはや、息を吹き返してはくれぬかと、十一時まで見続けたが、むだだった。それはおととしの夏のことで、この奇妙な経験を忘れることができじにいた。

『植物の神秘生活』という本に出会ったのはそういう時であった。分厚い著書なので簡単に説明することはできないが、しいていうなら、ごくありふれた植物にも感情や知性があり、他の生物と意思を伝え合う能力がある。単に伝え合うばかりか、人間が考えていることを予知することさえできるというのである。日本には、昔から人間と植物との間に細やかな交流があった。交流というより、同等に扱っていたというべきか。そういう文化の伝統を（A）の持ちぐされにしてほしくないと思うのである。思うに夕顔は、非常に敏感な植物なので、花を咲かせるという重大な秘事を凝視されることが堪えがたかったのではあるまいか。東洋と西洋の文明はざまで、私たちは何か大切なものを見失ったのではないだろうか。少なくとも私の場合、花にも魂があることを忘れていた。夕顔は、咲いたあとでも、切って器に入れる間にしぼんでしまうようなデリケートな花なのだ。そうと知りながら野蛮な行為に出たのは、他を思いやる心に欠けていたことにほかならない。事は夕顔だけの話ではない。—私のささやかな経験は、そういうことを語るようであった。①夕顔の花はものを言ったのである。

問一　傍線部①の意味として最も適当なものを、次から選べ。

ア　言わずにはおれない

イ　言葉にできない

ウ　言うまでもない

エ　絵で描くことができない

問二　傍線部②について、決定的瞬間に立ち会う心の高ぶりが最も強く表れている部分を、文中から三十字程度で抜き出せ。

問三　空欄Aに適当な漢字一字を入れて、慣用句を完成させよ。

問四　夕顔の花が咲く様子を人間の表情にたとえている部分を、文中から八字で抜き出せ。

問五　傍線部③とあるが、夕顔の花が咲かなかった理由を筆者はどう考えているか。それを表す一文の最初の五字を、文中から抜き出せ。

問六　傍線部④では、どのようなことを言ったと筆者思ったのか。最も適当なものを、次から選べ。

ア　花には人間の考えていることを予知する能力があること。

イ　西洋の文明より東洋の文明がすぐれていること。

ウ　夕顔は敏感な植物なので切るとすぐにしぼんでしまうこと。

エ　花を思いやる心など他への心配りが大切であること。

第二課　感受性の領分

長山弘

働くことが(A)であれば、遊ぶことは悲しきことである。遊ぶことが悦楽であれば、働くことは辛苦である。何が人の人生を充実させるのか。働くことなのか。それとも遊びだろうか。働くことと遊ぶことをめぐる議論は、人の歴史と同じくらい古い。なにしろ誰もが知っているもっとも古い寓話から、もうすでにして、答えのないその議論ははじまっているのだ。

冬の季節に蟻たちが濡れた食糧を乾かしていました。蟬が飢えて、蟻たちに食物を求めました。蟻たちは「なぜ夏に食糧を集めなかったのですか。」と言いました。と、蟬は「暇がなかったんだ、調子よく唄っていたんだよ。」と言いました。すると、蟻たちは(B)「いや、夏の季節に笛を吹いていたのなら、冬には踊りなさい。」と言いました。蟬と蟻たち—古代ギリシアの人アイソーポスの、いわゆるイソップ物語のなかでも、もっとも広く知られている寓話の一つ。この物語、①苦痛や危険に遭わぬためには、人はあらゆることにおいて不用意であってはならぬ、ということを明らかにしている、というのがアイソーポスの残した教訓だ。

名高い「寓話」という本の冒頭に、十七世紀フランスの詩人ラ・フォンテーヌは、その蟬と蟻たちの話をおいた。しかし、ラ・フォンテーヌの教訓はちがう。蟬は蟻に「春はなるまで食いつなぐため、穀物を少々貸して。」と頼むのだ。「取り入れ前に、きっと利息もつけてお帰しします。」だが、②蟻は貸すことを好まない。

③ラ・フォンテーヌの教訓は、しばしば誤解された。まちがえてはいけない、詩人は人間に友情の大切さを教えようとしたのではない。先見の明の欠如と怠惰を戒めようとしたのだ。もし貸していたなら、蟬の避けることのできない破産が、蟬たちをどんな災難にひきずりこむ羽目になったことか。百年後、フランスの法学者ボワソナードはそう言った。

イソップ物語のような古いふるい物語の魅力は、人びとの間に伝えられ、読みなおされ、語りなおされてきた魅力だ。古い物語が語るのは、物語それ自体だけではない。それは、伝えられ読みなおされ語りなおされるなかで、その物語にきざみこまれてきた、人びとによって生きられた日々の文化、歴史の記憶をも語るのだ。蟻の目でみれば、(C)が歴史をささえる。蟬の目でみれば、遊びが文化である。古い物語は、人びとがそこに、自分たちの経験を読みこむ場所なのだ。

問一　空欄Aに入る最も適当な漢字を一字書け。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

問二　空欄Bに入る最も適当な語句を、次から選べ。
ア　ためらって
イ　あざわらって
ウ　おどろいて
エ　あわてて

問三　傍線部1と同じ意味を表すことわざとして最も適当なものを、次から選べ。
ア　情は人の為ならず
イ　石の上にも三年
ウ　初心忘るべからず
エ　転ばぬ先のつえ

問四　傍線部②とあるが、蟻が蝉の穀物を貸すことを好まないという話することで、ラ・フォンテーヌが言おうとしたのはどんなことか。文中の語句を用いて二十五字以内で答えよ。

問五　傍線部③とあるが、どう誤解されたのか。文中の語句を用いて二十五字以内で答えよ。

問六　空欄Cに入る最も適当な語句を、文中から抜き出せ。

問七　筆者の主張として最も適当なものなを、次から選べ。
ア　イソップ物語のような古い物語では答えのない議論がおもしろく展開され、それが人を楽しませる要素となっていること。
イ　イソップ物語のような古い物語は働くことの大切さを教えており、それがすべての人の生きる支えとなっていること。
ウ　イソップ物語のような古い物語には遊びを戒める寓話が多く、それが人びとに支持されてきた要因となっていること。
エ　イソップ物語のような古い物語は人びとが経験を読みこむ場であり、それが人の心をひきつける力となっていること。

第三課　　あこがれ

阿部昭

母と二人でする食事の最中、彼は何度も子供部屋の柱時計に目をやった。彼は食べたくない。それでも何とか食べようとするのは母に怪しまれないようにするためである。母は絶えず少年を観察している。

「あんたが勝手起きてくるから、お母さん、とても助かる。」

「朝みんなとソフトボールをやるから。」彼は口を動かしながら言う。

「たがら、早く行って場所を取らなきゃならないから。」

①少年は母にうちの時計は正確かどうかときいた。母は狂っていても一、二分だと言った。でも、その一、二分が彼には問題だった。少年は毎朝「白百合女子学園」の生徒たちが乗る江ノ島行きの電車に合わせて家を出るのである。彼女はその十分前に玄関を出てくる。お互いの家は五十メートルと離れていないのに、うまく出会うことがとても少なかった。少年は歩きながらしょっちゅう道の前と後ろに気を配り、わざとのろのろ歩いたり、急に思い出して早足になったりした。そして駅へついてからほんの一、二分の間、向かい側のホームにセーラー服の彼女がかばんを提げて一人でぼんやり立っているのや、同級生とおしゃべりしているのを、②あまり見過ぎないように意識して見るのだった。その朝、彼女がちょうど、門から出てきたところへ少年が行った。少年の心は躍った。まだ二十メートルも離れていた。その二十メートルを彼はうつむいて歩いた。彼女は門のそばの石垣にもたれるようにしていた。一頭をかしげて、年上らしい落ち着いた目をして。「おはよう。」彼女の方から大きな声で言った。少年はもっと近づいてから、それも小さな声でしか言えなかった。彼は何かと言われても、ただ (A) するだけだった。そしてひどく急ぎ足になった。彼女は小走りしながら腕時計を見た。

「何分の電車に乗るの？遅れそう？」

「さあ、どうかな。」彼は逃げるようにして、わき目もふらずにとっとと歩いた。

「じゃあ走れば。一緒に走ってあげる。」

そこで彼は走り出した。これは3おかしなことになったと思いながら。彼女も走ったけれど、たちまち少年に引き離された。彼はかまわず走り続けた。走りながらやっぱるどうしても彼女が好きなのが分かった。好きだ。彼は後ろも見ずに走った。彼女は途中でのびてしまっていた。少年が振り返ると、手で小さなバイバイをして先に行けと行った。「(B)」　で、彼はまた走らなければならなかった。

問一　傍線部①のように少年が時間を気にしているのを表す動作を、文中から二十

字以内で抜き出せ。

問二　少年が家を出てからなんとかして「彼女」に出会おうとしている様子がよくわかる一文を文中から抜き出し、最初の五字で答えよ。

問三　傍線部②の理由として最も適当なものを、次から選べ。

ア　彼女のことが好きでずっと見ていたいが、そのことを彼女に知られるのは恥ずかしいから。

イ　彼女の方から少年の方を見つめることが多く、視線が合うと困るから。

ウ　二人の関係はみんなに秘密であり、まわりの同級生に知られたくなかったから。

エ　彼女に顔を覚えられると、今後いろいろやっかいなことになるから。

問四　空欄Aに入る最も適当な語句を、次から選べ。

ア　わくわく

イ　しょんぼり

ウ　いらいら

エ　おどおど

問五　傍線部③の内容を二十五字以内で答えよ。

問六　文中の空欄Bに入る言葉として最も適当なものを、次から選べ。

ア　わたし、もう走れないわ。

イ　ちょっと待ってよ。

ウ　遅れるといけないわ。

エ　それじゃあ、また明日ね。

問七　本文を内容から二つの部分に分けるとき、後半部分の最初の五字を書け。

第四課　そのままの自分を活かす心理学

榎本博明

人はだれも心のなかに現実自己と理想自己を持っている。現実自己とは、自分自身が捉えている現にあるがままの自分のイメージのことで、理想自己とは、(A) 自分のイメージのことだ。

自分は意志が弱い、勤勉さが足りない、ユーモアが足りないなどと悩み、自己嫌悪に陥る者は、いわば現実自己と理想自己のギャップに悩むわけだ。あるべき自分とはあまりにもかけ離れた現実の自分に嫌気がさすというのはだれにでもあることだ。きまじめな者は、このギャップがダメ人間の証明であると勘違いしてしまう。それが勘違いであることは、ちょっと冷静に考えてみればわかることだ。

そもそも何のための理想自己か。現実自己を向上させるために現実自己より価値の高いところに設定したのが理想自己だろう。したがって、両者にズレがあって当然と言える。現実自己と理想自己が完成に一致し、現実の自分に何の不満もないという者こそ、かえって①怠慢というものだ。現実自己を少しでも向上させるためには、このズレはなくてはならないものなのだ。

それにしても、いつまでたっても現実自己と理想自己のギャップが大きく、一向に縮まる気配がないと悲観する者あろうが、これも勘違いだ。というのは、理想というのは常に現実の数歩先に設定するものだ。現実自己が前進すれば、その分要求水準が高まり、(B)。けっして追いつくものではないのだ。

現実自己と理想自己のギャップに自己嫌悪する必要はなく、そのギャップをいかにして縮めたらよいかに頭をひねればよい。うまく対処した頃には、また (C) ことになる。また頭をひねればよい。こうしたいたちごっこが成長へと導いてくれる。目ざすべき目標がはるか先にあるからこそ、生きる意味もあり、張り合いもあるというものだ。

②現状に甘んじることなく絶えず成長するためには、甘言ばかりで調子のよい者より、ちょっと憎たらしくとも苦言を呈する者を身近に持つことが大切と言われる。甘いことばばかりかけられていると、いい気になって溺れてしまう。あえて苦言を呈し、憎まれ役をかって出てくれる者こそ真の友と言える。

内省癖ゆえに苦しむ内向的人間は、自分のなかにこの強い味方を備えているようなものだ。落ちこむより、③楽んで悩まされるのが得策だ。

問一　空欄Aに入る最も適当な語句を、文中から四字で抜き出せ。

問二　傍線部①とあるが、どのような点で怠慢というのか。最も適当なものを、次から選べ。

ア　理想自己の価値を認めず悲観的なっている点
イ　理想自己を追求せず現実自己を肯定している点
ウ　現実自己に嫌悪し理想自己のみ追求している点
エ　現実自己を向上させることに努めている点

問三　空欄Bに入る内容を「前進」という語を用いて、十三字以上十八字以内で答えよ。

ア　自己嫌悪の必要がなくなる
イ　理想と現実が一つに重なる
ウ　現実自己のイメージを絞る
エ　別のギャップに悩まされる

問五　傍線部②の状態を具体的に表現している部分を、解答欄に合うように傍線部より前から十五字以内で抜き出せ。

							状態

問六　傍線部③とあるが、何に「喜んで悩まされる」というのか。解答欄に合うように文中から十五字以内で抜き出せ。

に喜んで悩まされる。

問七　筆者の主張として最も適当なものを、次から選べ。
ア　現実自己と理想自己の両者をいつか完全に一致させる必要がある。
イ　現実自己と理想自己の両者が完全に一致したとき真の友が得られる。
ウ　現実自己と理想自己の両者のズレに悩むことが自分を成長させる。
エ　現実自己と理想自己の両者にズレを感じないことが得策といえる。

第五課　二十一世紀に生きる君たちへ

司馬太郎

昔も今も、また未来においても変わらないことがある。そこに空気と水、それに土などという自然があって、人間や他の動植物、さらには微生物にいたるまでが、それに依存しつつ生きているということである。自然こそ（A）の価値なのである。なぜならば、人間は空気を吸うことなく生きることができないし、水分をとることがなければ、かわいて死んでしまう。さて、自然という「(A) のもの」を基準に置いて、人間のことを考えてみたい。人間は、一くり返すようだが—自然によって生かされてきた。古代でも中世でも自然こそ神々であるとした。このことは、少しも誤っていないのである。歴史の中の人々は、自然をおそれ、その力を①あがる、自分たちの上にあるものとして身をつつしんできた。その態度は、近代や現代に入って少しゆらいだ。(B) という、思いあがった考えが②頭をもたげた。二十世紀という現代は、ある意味では、自然へのおそれがうすくなった時代といっていい。

同時に、人間は決しておろかではない。思いあがるということとはおよそ逆のことも、あわせ考えた。つまり、私ども人間とは自然の一部にすぎない、というすなおな考えである。このことは、古代の賢者も考えたし、また十九世紀の医学もそのように考えた。ある意味では平凡な事実にすぎないこのことを、二十世紀の科学は、科学の事実として、人々の前にくりひろげてみせた。二十世紀末の人間たちは、③このことを知ることによって、古代や中世に神をおそれたように、再び自然をおそれるようになった。おそらく、④自然に対しいばりかえっていた時代は、二十一世紀に近づくにつれて、終わっていくにちがいない。

「(C)」と、中世の人々は、ヨーロッパにおいても東洋においても、そのようにへりくだって考えていた。この考えは、近代に入ってゆらいだとはいえ、右に述べたように、近ごろ再び、人間たちはこのよき思想を取りもどしつつあるように思われる。この自然への⑤すなおな態度こそ、二十一世紀への希望であり、君たちへの期待でもある。そういうすなおさを君たちが持ち、その気分をひろめてほしいのである。そうなれば、二十一世紀の人間は、よりいっそう自然を尊敬することになるだろう。そして、自然の一部である人間どうしについても、前世紀にもまして尊敬し合うようになるのにちがいない。

問一　二箇所の空欄 A には共通の語が入る。最も適当なものを、次から選べ。

ア　不動

イ　不定

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com